



5:1 さて、三日目にエステルは王妃の衣装を着て、王室の正面にある王宮の内庭に立った。王は王室の入口の正面にある王宮の玉座にすわっていた。

5:2 王が、庭に立っている王妃エステルを見たとき、彼女は王の好意を受けたので、王は手に持っていた金の笏をエステルに差し伸ばした。そこで、エステルは近寄って、その笏の先にさわった。

5:3 王は彼女に言った。「どうしたのだ。王妃エステル。何がほしいのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」

5:4 エステルは答えた。「もしも、王さまがよろしければ、きょう、私が王さまのために設ける宴会にハマンとごいっしょにお越しく下さい。」

5:5 すると、王は、「ハマンをせきたてて、エステルの言ったようにしよう。」と言った。王とハマンはエステルが設けた宴会に出た。

5:6 その酒宴の席上、王はエステルに尋ねた。「あなたは何を願っているのか。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう。」

5:7 エステルは答えて言った。「私が願い、望んでいることは、

5:8 もしも王さまのお許しが得られ、王さまがよろしくて、私の願いをゆるし、私の望みをかなえていただけますなら、私が設ける宴会に、ハマンとごいっしょに、もう一度お越しく下さい。そうすれば、あす、私は王さまのおっしゃったとおりにいたします。」

5:9 ハマンはその日、喜び、上ぎげんで出て行った。ところが、ハマンは、王の門のと

ころにいるモルデカイが立ち上がろうともせず、自分を少しも恐れていないのを見て、モルデカイに対する憤りに満たされた。

5:10 しかし、ハマンはがまんして家に帰り、人をやって、友人たちと妻ゼレシュを連れて来させた。

5:11 ハマンは自分の輝かしい富について、また、子どもが大ぜいいることや、王が自分を重んじ、王の首長や家臣たちの上に自分を昇進させてくれたことなどを全部彼らに話した。

5:12 そして、ハマンは言った。「しかも、王妃エステルは、王妃が設けた宴会に、私のほかはだれも王といっしょに来させなかった。あすもまた、私は王といっしょに王妃に招かれている。

5:13 しかし、私が、王の門のところすわっているあのユダヤ人モルデカイを見なければならぬ間は、これらのことはいっさい私のためにならない。」

5:14 すると、彼の妻ゼレシュとすべての友人たちは、彼に言った。「高さ五十キュビトの柱を立てさせ、あしたの朝、王に話して、モルデカイをそれにつけ、それから、王といっしょに喜んでその宴会においでなさい。」この進言はハマンの気に入ったので、彼はその柱を立てさせた。

命をかけてのエステルの嘆願は王に受け入れられました。神様はエステルの信仰に答えてくださったのです。エステルはもともと神様に命さえも任せていたので、冷静な洞察と判断ができたのだと思われます。彼女は王の様子を見るため、またハマンを安心させるために、繰り返し酒宴を設けました。

ハマンは上機嫌で、さらに憎いモルデカイを殺すための木を立てますが、これは後に彼自身が架けられることになるのです。

欲や願望を主に委ねて、自分に死んだ人は、肝がすわり恐れないので、冷静な判断が出来るようになります。また敵が勝ち誇って自分を陥れようとするときにも、あせらずに主のときにお任せできるものです。主のために生きるならば、必ず主の勝利が与えられるので、大きく構えて主のみわざを見せていただきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

